

身近な自然の貴重・重要性 新発田市五十公野の公園整備

石 沢 進

ヒトの生活圏に近い自然に対する人為的作用について気になることが多いので、ここで取り上げ、多くの方々のご意見を頂きたい。

ヒトは自然環境を基盤にして生活し、それに依存していることが多大である。ヒトと自然環境とは切り離すことのできない関係にあることは言うまでもない。しかし、自然環境に対するヒトの接し方には配慮しなければならない点が多く、慎重に対応する必要があるのではないかと考えている。

ヒトは自然を利用することが一方的であり、十分な気配りをしていないのではないかと思う。近年、よく言われる「自然との共生」、「自然環境の賢明な利用」など、文字では行政レベルでもよく使われているが、具体的にその意味を認識しているかどうか、疑問点が多い。今回は、いわゆる「里山」に対するヒトとの係わり、特に森林公園・森林を活用した公園作りの在り方について考えてみたい。

森林を生かした公園作りの基本的な配慮

●森林の階層構造を壊さないこと

森林は、上層・中層・下層とそれぞれに生活している植物があり、そのような構造を階層構造と呼んでる。上層だけを残して、中層・下層を壊した森林は、極めて単一化されたものになる。各層を健全な姿で管理することが肝要である。上層だけを残して下刈りした状態は、一見して見事であるが、大切な自然の破壊であり、林としては極めて惨めな存在となる。

●森林内に生育する植物相にできるだけ影響を与えないこと

上記のことと関連するが、各層には、上層を占める植物も幼体で生えている他に、それぞれの層に異なった植物が生育している。低木や草本は、下層に限って生育している。その構造を破壊することは、中層・下層の植物に大きな障害を与えることになる。つまり、その林の下に生える植物を失うことになり、中には絶滅させてしまうこともある。

●森林という生態系の多様性を維持すること

森林には植物だけが生きている訳ではなく、様々な動物が生息している。ある植物だけを食べている昆虫もいる。植物がなくなれば、その昆虫も姿を消してしまう。森林にはお互いに支えあえながら生きている様々生物で構成され

ている。つまり、森林の生態系が保たれている。そのような生態系は、上層を占める植物の多少により、微妙に異なった生態系が維持されている。一見マツの林で単一のように見える林でも中身は様々で異なった構成になっていて、多様な生態系が存在する。そのような生態系の多様性を壊すことないように配慮する必要がある。生態系の維持には、自生の植物の保護がまず大切である。それによって多くの動物が食料として利用し、生活している。昆虫の中には、餌にしている特定の植物があり、その植物が無くなれば昆虫の生きる場を失う。昆虫が多く居れば鳥たちも集まる。森林は生物にとって大切な楽園であり、それを壊すことないように考えるべきである。

●森林を皆伐に近いような状況（再生不可能な状況）にしないこと

中・上層だけを残して手を加えると以前の生態系とは全く異なったものになり、再生不可能な状態になるおそれがある。多分再生するとしても、かなりの長い年月が必要であろう。下刈り以前の森林は、少なくとも数十年かけて形成されたものと見られるが、その人的行為で瞬時にしてそ



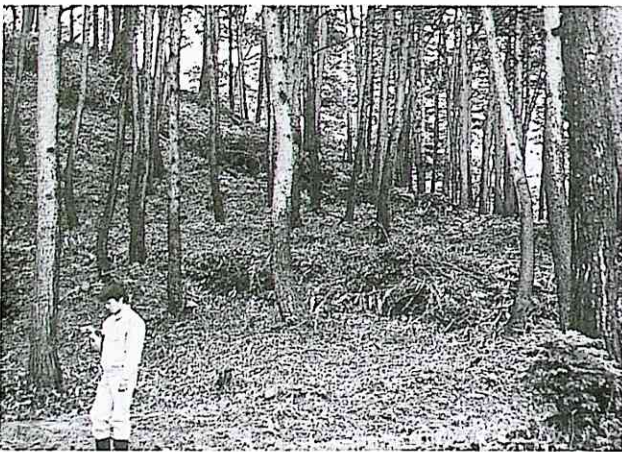
の歴史を失うことになる。極度な下刈りは、林そのものの機能を失うだけでなく、生態系の再生不可能な局面に追い込むことになる。

●地域の特色（地域の自然の豊かさ）の喪失しない整備をすること

地域や土地が変われば、そこにだけ存在する個性を持った森林が成立する。マツ林であれば、何処でも同じように見えるが、地域や立地によって異なっている。例えば五十公野には、そこだけに存在する個性を持った森林が形成されているはずである。そこを大きく改変すれば、その土地固有の自然の豊かさを失うことになる。

●教育の場（研究の場）としての活用が可能な状況にしておくこと—身近な自然への理解・重要性を知る拠点として活用—

都市近郊の自然は、かけがえのない自然の贈り物であり、特別な理由のない限りは温存して活用することが期待される。環境の時代といわれる今日、都市の近郊に自然豊かな森林が存在する場合、それを破壊してしまうことは、貴重な地域の財産を失うことに匹敵する。そのような場所に市民の多くの方が訪れて、自然の豊かさに接し、その地域に住む人々の幸せを享受することこそ大切な時代であると信じる。自然の営み、からくりを知る大切な教育の場である。一方では、自然の営みには未知の世界が山積している。森林を温存することにより、そのからくりを研究する場としても貴重である。無闇に森林を破壊することはそのような利用やその機会を失うことになる。



上記の公園作りの基本的な配慮に照らし合わせて、五十公野の公園整備を見るに、愕然としてしまい、自然に対する無神経さに憤りを感じる。公園の沿道沿いはアカマツだけを残して中層・下層はすべて刈り取る作業を進めている。一部ならとにかく、沿道沿いすべてにまで、下刈りを終わってしまった。沿道を歩いてもアカマツだけが、見事に残されて、一見素晴らしいと思う方も多いと思うが、極めて残念な行為である。自然に作り上げた生物の多様な生態系を単純化することは『自然を大切にすることから考えると、逆行する行為である。五十公野のようにヒトの生

活圏の近くで、様々な生物が生きて複雑な生態系を作り出しており、それに接することのできる大切な場を、無神経に破壊してしまうのは何故であろうか。身近な貴重な自然の消失であり、環境保全の時代に逆行していると思う。身近なすぐれた自然を大切に残留して、次世代に受け継ぐことが最優先させるべきである。

新発田市の五十公野の自然は、平野部に独立した山体であることから、生物の分布上で特色があり、貴重な地域である。従ってこの地域の改変には、十分な配慮がなされるべきであると考え。長年かけて作り出された里山であり、これまでもヒトが活用してきたと思われるが、最近数十年は放任され、林が自然の推移に委ねられてきたはずである。それなりに自然のバランスが回復してきている状態であると推察していた。あまりヒトの影響を与えない樹林として温存することが大切な地域と思っていた。

しかしながら、新発田市の「公園整備」は、ヒトの一方的な利用だけを優先して「身近で貴重な生態系」を破壊していることに気づいて頂けないのが残念でならない。新発田市五十公野の特色を生かした公園作りを行うことが、市民にとっても、他地域から訪れ人にとっても重要である。平野部に位置する小高い五十公野の山系は、生物にとって恵まれた条件を備えており、実際に多くの種類が生活している。まさに自然と共生することを考えなければならない場である。

森林の下刈りが生態系にどのような影響を与えるか、多分それに対する解答にはいろいろ見方ができるであろう。少なくとも下草の全体刈り取りは、生態系に大きな打撃を与えることは間違いないであろう。下刈りの影響を知るために、公園の樹林すべて同じような刈り方でなくて、刈り取りの程度を変えるなど将来に向けての配慮があってもよいと思う。

五十公野の山系には、マツタケがでることでも有名であり、公園の中にマツタケを生やす意図で整備をしたという面もあるかも知れない。しかし、ヒトの多く訪れるところには、特定の目的で整備するのではなく、多方面に配慮して、五十公野の自然を生かした形が望ましいと考える。公園整備の在り方に行政も市民も考えて頂き、ヒト中心の公園ではなく、貴重な自然に配慮した公園作りにしてほしい。

アカマツを大切にするという、林業の経営の立場で下刈りを行っているとも見られるが、ヒトの多く訪れる五十公野の公園の場合は、上記の基本的な公園作りの配慮を重視して進めてほしい。

下刈りの作業には、莫大な予算を使っているはずである。予算を計上する前に、どのような整備を行うか、行政も市民も考えてほしい。行政では「環境整備指針」なる方向性

を打ち出しているのに、実際にはその方針と無関係に進んでいる。多様な生態系を壊して森林の単一化の方向を優先させている。

マツクイムシの被害が、終息したわけではないし、まだまだ続くと予想されるが、もしもマツだけが残された五十公野の整備地域に被害が広がり、マツが全滅するような事態になれば、みじめな状況になろう。樹林を単一化することは、その危険性も増すはずである。

公園作りについては、五十公野の公園だけでなく、県内の森林公園の在り方にも問題点があると思う。上層を残し

て下層を刈り取る公園作りは、その土地の生態系に与える影響が大きいはずである。公園整備を行う際には、将来を見通し、生態系に打撃を与えない有意義な行為であってほしい。

林業経営の立場で下刈りを行うことは有り得ることで、目的とする樹木を残して、他の樹種を伐採してしまうことは古来から行われてきた作業である。下刈りすべてを否定している訳ではないが、下刈りを行うことの妥当性は、目的や場と時を考慮して十分に研究する必要がある。

各地の公園作りには、その地域の自然環境に配慮して特色を生かした整備を行うことが肝要である。

植物にみられる奇形現象

植物には正常な生長・発育とは異なった異常な伸び方をする場合がある。古くから注目されており、白井光太郎の「植物妖異考」(初版 1925)、藤田哲夫の「植物畸形学」(1949)などの著書もあり、その後さまざまな記録がある。過去の記録と重複する場合もあると思うが、県内でみられた奇形について本誌に掲載しておきたい。会員の方々が観察した事例を投稿して頂けると幸いである。

●コオニユリ 茎頂に球根を形成

オニユリは、普通茎の上部の葉腋にむかご(無性芽)をつける。コオニユリもまれに茎の頂部に無性芽をつけることが知られている。本個体(写真)では、花茎部分

に無性芽を形成し、その上部に葉を数枚つけて「幼植物」のように見える。果実をつけた茎の頂部にこのような無性芽をつけるのは、初めて見たので、写真を掲載した。

(新発田市五十公野 2004年10月4日)

●ウツボグサの帯化(3頭花序)

茎が帯化して花序が分岐して3頭になったとみられるもの。植物の帯化現象はいろいろな植物によく見かけるが、ウツボグサでは、あまり例がないようにも思う。表紙2の写真に掲載したので、類似の現象が見られたら、お知らせ頂きたい。

写真は櫻井幸枝氏による。

(石沢 進)

